

Wellness & Medical Care

子どもの 「食育」を 考える 10



「お米」を通して学ぶ、
「科学」と「多様性」

東京農業大学第一高等学校中等部の総合学習のテーマの1つは、「お米の科学」です。中学2年生では東京農大の研究室で、お米の「デンプン」の働き方や観察を行い、普段食べているお米の成分や品種を科学的に解き明かしていきます。もち米、うるち米、インディカ米など、耳にしたことはあるけれど、それぞれのお米は何が違うのか、どんなお米なのかということを、東京農大の研究施設での講義と実験を通して学びます。

この学びの背景にあるのが中学1年生で体験する「稲作」です。田植えから稲刈りまでの過程を実際に体験するからこそ、その先の学びが見えてくるのです。例えば、「田植え」で植える苗は、お米という植物の種子から育てたものですが、収穫したすべての種子を撒くわけではありません。東京農大の初代学長である横井時敏先生は、「塩水選」といって、生卵が沈まない濃度の食塩水に「もみ」を入れて、沈んだ「もみ」だけを「種もみ」として撒くことで、お米の収穫量をあげられることを証明しました。農業に科

学の視点を与えたこうした考え方が農業体験の域を超え、稲作を通しての科学的な実学体験をするのが、「お米の科学」なのです。

一方で、この実学の学びは、実験や、教室の知識だけが全てではないという姿勢を教えてください。地球の歴史の中でつながってきた生物のなかにも、絶滅してしまった種類がいます。すると、間をつなぐ段階の生物がいなくなることになり、どんな問題があるのでしょうか。授業の際に生徒から出た難しい質問ですが、この問いにはこう答えます。「田植えをした田んぼで、足を入れた水の中に何種類の生き物がいたよね。毎日、口に入るお米がそうした生き物のつながりの中にあるのと、何も生き物のない場所に、ただ肥料をあげて育ったお米とは違うように思う。長い地球の歴史のなかで育ってきた、たくさんさんの生き物の存在を「多様性」というのかな」。

「お米の科学」では、お米という食べ物の先につながっている生態系も学んでいるのです。



／ 東京農業大学第一高等学校・中等部 ／

東京都世田谷区桜3-33-1

TEL 03-3425-4481

<https://www.nodai-1-h.ed.jp/>

情報誌 MiS-MO 5月号 に掲載されています

